

「シベリア抑留体験～ラーゲルの泥～」 中村太郎氏

大正 13(1924)年、長崎に生まれた中村さんは、中国の大連で少年期・青年期を過ごされました。中村さんには、シベリアでの抑留体験を中心に戦時中の体験を語っていただきました。

昭和 19(1944)年 11 月、大連駅に集められ、東寧に向い、国境の部隊に配属される。同年 12 月、転属。ここで寒さと空腹に耐えながら初年兵としての訓練を受ける。昭和 20(1945)年 4 月、一等兵に昇進。同月末、穆稜に転属し、対戦車壕を掘る。さらに伊林に転属。ここは毎日殴られる最低の部隊であった。同年 8 月 9 日の明け方、兵舎近くで爆発音がした。米軍機による攻撃かと思ったが、ソ連軍の越境攻撃であった。戦闘命令がでた。これで終わりだと思った。小銃と手榴弾では歯が立たない。終戦を知らされずさまよい続け、ソ連軍の捕虜になった我々の部隊は、同年 9 月末、牡丹江に近い兵營の空屋に集められた。「マンドリン」(自動小銃)を抱えたソ連兵の監視のもと貨車に詰め込まれ、表から扉に鍵をかけられた。先の見えない旅の始まりだ。何日も貨車は走り、明け方停車をした。飲み水も食糧もない。「あと何時間かでバイカル湖だ」とソ連兵が話した。我々は運命に絶望した。寒村に下車し、命令により住み家となる幕舎(テント)を張った。さらに冬を越すための家を造るよう命じられた。体力は日ごとに衰えていき、兵隊は死に始めた。死んだ兵隊を埋葬するための穴を掘るのだが、掘った人は体力を使い果たし、次に死んでいった。私はビロビジャン病院に入院させられた。退院後、ロンドコ、ビラ、ビラカン、チョプローゼルスクなどのラーゲル(収容所)に収容され、道路工事・貨物列車の荷物の積み下しなど各種の使役に従事した。ラーゲルに収容されてからは飢えがますますひどくなった。

(講演の内容は、「資料館だより」から転載しました。)